

日本聖公会

# ウィリアムス神学館ニュース

2015年  
第91号

The Bishop Williams  
Theological  
Seminary NEWS  
日本聖公会  
京都教区  
発行・編集人  
吉田雅人  
〒602-8011  
京都市上京区烏丸通  
下立売上 桜鶴門町 380  
☎ 075(431)5406  
FAX 075(431)5445  
Williams@muc.  
biglobe.ne.jp  
寮 ☎ 075(431)5408

## 誤解

「ウィリアムス主教の「道を伝えて己を伝えず」」

大塚 勝

ウィリアムス神学館は、ウィリアムス主教の「道を伝えて己を伝えず」を建学の精神としています。その「道」というのは、イエス・キリストの福音もつと一般的に言えば「キリスト教」であり、「己」とは、自分という人間やその思いや行いです。

ところが、この言葉が、しばしば「ウィリアムズ主教ご本人が言ったフレーズだ」と誤解されていることに気づきます。

この言葉は、ウィリアムズ主教が逝去（一九一〇年二月二日）された後、日本聖公会の有志（東京と京都）が、主教の出身地であるアメリカ・バージニア州リッチモンドの墓地に建てた記念碑（追慕碑）の中に書かれた言葉です。この碑文を書いたのは、当時、なかなかの美文を著す人と言われていた東京教区の山縣雄杜三司祭です。山縣司祭は、ウィリアムズ主教が、キリストの福音を伝えることには、何の遠慮もなく、寸暇を惜しんで宣教された。それは言葉だけでなく

ウィリアムズ主教の人柄・生活のすべてを通して宣教されたこと、自分の思いや行いを誇らず非常に謙虚であったこと、そういう主教の人物や宣教姿勢を「道を伝えて己を伝えず」という言葉で表したのである。

主教の宣教姿勢を語る資料や逸話はいくつも残っています。例えば、日本在住の五〇年間で、一年三六五日・春夏秋冬、毎日朝六時起床し、夜一二時就寝。この間、四回の帰国以外は休暇・休養をとらなかつたといえます。定例会議には、体調が悪い時でも欠席しなかつたため周りの人が「体調が悪い時は、休んでください」と言つと、「私は自分の食べ物を人に食べていただくことが出来ません。そんなことをすれば、私は痩せます。」と主の業をなすことが、主教の糧であつたといふのです。

主教になつて以来、英国人の堅信式の際に1〜2度、英語で説教をされたが、それ以外は英語で説教をされなかつたといいますが、その説教を聞いた人は「心震えるものを感じた」そうです。主教の説教は、雄弁でもなければ、語調、修辞が麗しいもの

ではなかつたけれど、一生懸命に熱心に神の恩寵を説かれたといえます。自分は「日本人に福音を伝えるために遣わされたのだから日本語で話すべきだ。日本人への説教は日本語でなければならぬ」と言うのが、主教の持論だったのである。集会にも熱心に出席されていきました。（次頁下段へ続く）



二〇年くらい前からだろうか。教区や管区の諸委員に属する青年たちから「自分がここにいていいのだろうか」という相談を時おり受けるようになった。進退についての悩みである。はじめはその意味がよく分からなかつた。わたしが知っている問いは、自分が「ここにいていいか」「ここにいたいのか」だったからである。これらに比し前者は他律的に思える。その後驚いたのは、神学生からも、しかも年代を問わず、時々そうした問いが聞かれるようになったことである。わたしの指導教授は（現代では）「実存的である」と言われても何を決断していいのかわからなくなつていて」と言っていた。また、やはり二〇年程前の調査だが、「先進国」のなかで日本の子どもたちが最も自己肯定感が低いという結果が出ていた。いまや日本社会全体が自己肯定感を巡る深刻な実存状況にあるのではないか。しかしそのような状況のなかで輝く福音の光がある。その光を遮ることなく伝える奉仕にわたしたちは招かれている。神学校の間にせめて自己のそうした課題だけは、聖書に向き合い、他者そして神との対話と関係の中で解決してから現場に出てほしい、と切に願うものである。（黒田 裕）

**二〇一四年度 卒業礼拝**  
 —四名が新たに牧会現場に—

三月一二日(水)午前十一時より、二〇一四年度ウイリアムズ神学館卒業礼拝が、京都教区主教座聖堂で百五十名以上の方々と共に行われました。今年度は、パウロ窪田真人(くぼた まさと)聖職候補生(横浜教区)、パウラ麓 敦子(ふもと あつこ)聖職候補生(京都教区)、ペテロ金山将司(かなやま まさし)聖職候補生(大阪教区)、パウロ歳實 勲(としざね いさお)聖職候補生(神戸教区)の四名が、神学館での三年間の学びを終えて巣立られました。

説教者の大西 修大阪教区主教は、神学館での学びは知的学習に留まらず、もっと大きく広く深いものであり、奉仕職を目指してなされる学びであること。それは道であるキリストを伝え、キリストに従っていく道に思いを巡らせることであり、神によって創られた全てのものに、キリストによって示された神の愛を伝え、人々に伝え、人々と共に歩んでいく使命を確かなものにしていく召命の道を探し求める三年間でもあった。そしてこれからは、神学館での学びを基礎として、より小さくされた人々の声を聴く旅の始まりであり、いつもそこに思いを寄せて生



卒業礼拝終了後の記念撮影

きる、そのことを現場の中で覚えていた  
 だきたい、と述べられました。

その上で、次の三点を心に留めるように勧められました。それは第一に、語る人である以上に、じっくりと聴く人になつていただきたいこと。第二に、自らの過ちや非を謙虚に認め、主のみ前に懺悔し、人々に対して赦しを乞うことに潔く

あること。  
 第三に、  
 自らが多くの人々の祈りに  
 よって支えられて  
 いること  
 を覚え、  
 日々の祈りのうち  
 に感謝を  
 絶やさず  
 に働くこと、それ  
 らの人々の祈りの  
 うちに覚える。このことを強調され、現場に立つ四人を祝福されました。その後、列席教員全員によって卒業生のために祈りが献げられ、館長より卒業・修業証書が手渡されました。(次頁下段へ)

◀前頁下段から

先年、京都教区から立教学院に移管されたウイリアムズ主教関係の数多くの貴重な資料は、ウイリアムズ主教が帰国される時山辺久吉司祭に焼き捨てるように依頼した帳簿書類・書籍の中から、発見されたものです。主教は、決して自分の説教原稿や、書き付けたものを日本に残そうとはしなかつたのです。すべて処分して帰国された(少なくとも主教ご自身は、処分したつもりだったので)。

このようなウイリアムズ主教の、有り様を、山縣司祭は「道を伝えて己を伝えず」と評したのです。こういう宣教姿勢を評したのです。

(本館主事・教員日本キリスト教史担当)

注1:リッチモンドにある記念碑(追慕碑)とほぼ同文の記念碑が、一九三〇年京都・若王子山墓地にも建立されました。ウイリアムズ神学館は、毎年春秋に墓参をしています。なお、この記念碑は、教派こそ違いますが同時代にキリスト教宣教に力を尽くした新島襄が眠る同志社墓地と隣同士にあります。

# 卒業生からの手紙

## 歴史と共に 祈りの丘へ

パウロ 窪田 真人



四月から指導司祭である入江修司祭様のもと、横浜山手聖公会で勤務を致しております。

横浜山手聖公会は、一八六三年に現在の山下町付近に建設され、その後、一九〇一年に現在の山手本通りに建てられました。観光地のご真ん中にそびえ立つ土地の中で毎日のように多くの人々が平安の時を求めて訪れています。

横浜山手聖公会の一日は祈りとともに始まります。早朝、まだ観光客もいない静かな時間帯に献げる「朝の礼拝」はこれから始まる慌ただしい一日に向けて心を整えてくれると共に神様と向き合うことのできるとても幸せで贅沢な時間です。日中は、教区・教会の仕事や自身のた

めの勉強、そして、教会維持管理のための作業（掃除、草抜き、剪定など）をして過ごしています。

特に最後にあげた維持管理のための作業は教会が地域の一員であることをしっかりと自覚するため、また、お手伝いをしてくださる信徒さんたちとの触れ合いの場でもあり、特に力を入れて励んでいます。

三年間の神学校校生活で学んだ多くのことを現場でも活かしつつ日々を歩んで参りたいと存じます。

(横浜教区聖職候補生・山手聖公会勤務)

## 美しい新緑の中で

パウラ 麓 敦子



在学中の皆様のお支えに心より感謝致します。

赴任後五日目にイースターを迎えた後、葬送式、洗礼式、埋骨式、逝去者記念の式と無我夢中の毎日を過ごし、気が付けば四月が終わろうとしていた。

朝は息子の弁当作りに始まり、慣れない仕事に一つ一つあたふたし、道に迷い

（前頁下段から）

式後は会場を京都教区センターに移し、多くの方々からのお祝いや励ましの言葉、そして心づくしのごちそうをいただきました。

四人の方々の方々の今後のお働きの上に、神様の祝福と導きをお祈りください。

\*\*\*\*\*

ながら訪問をし、「今日は時間がないからお祈りを省略しよう」「疲れたから昼寝をしよう」という悪魔の囁きと必死に闘い、毎日読もうと机の上に出していた『総説 新約聖書』を溜息とともに本棚に戻し……。決められた時間に家を出て、多くの人々の中で働くこれまでの職業生活とは違い、大部分を自分で管理しなくてはならない生活は、怠惰な自分と寂しさとの闘いである。まだ家事と仕事と学びのバランスがうまく取れずに心が波立っている。

それでも、「キリスト教のお葬式っていいですね」と言っただけだった末信徒の遺族の方や、突然の訪問にもかかわらず、歓待し長年の想いを語って下さった信徒の方との出逢いに、人と出逢うことはこんなにも素晴らしいことだったのかと改めて感激した。目に映る新緑がこれまでにないキラキラと輝いて見える春の中に在る。 (京都教区聖職候補生・京都聖ヨハネ教会勤務)

こどもたちから元気をもらって

ペテロ 金山 将司



ウイリアムス神学館を卒業して約一ヶ月弱、芦屋聖マルコ教会で勤務が始まってひと月がたちました。今、

私は芦屋聖マルコ教会に定住してご奉仕をさせて頂いています。ウイリアムス神学館の賑やかな生活から、芦屋の閑静な住宅街の広い家に一人で住んで、一人で食事をし、そして一人で朝夕の礼拝を捧げる生活の差から、いつの間にか自分が共同生活を楽しく感じていたのだなということに改めて感じました。

しかし最近では四月一日から芦屋聖マルコ教会がこども園という新しい制度のもとでスタートして、毎日子どもたちの元気な声に囲まれています。おかげで、子どもたちから元気をもらって、咳をしても一人という寂しさを大いに癒してもらっています。

先日、信徒さんのもとへ一人、牧会訪問をさせて頂きました。こうして実際に一人で牧会訪問をさせて頂きたくと、

心細さもありましたが、それ以上にウイリアムスの講義で聞いた、そして学んだ牧会者の責任を改めて感じさせられました。今後もしっかりとこの責任を意識しながら、そしてウイリアムスで学んだことをしっかりと活かすことのできるようにこの道を進んでいきたいと思えます。

(大阪教区聖職候補生・芦屋聖マルコ教会勤務)

近況・・・気づきと格闘

パウロ 歳實 勲



早いもので、ウイリアムス神学館での生活を終えて、二か月が経過しようとしています。現在、私

は、神戸聖ミカエル教会の牧師館に居住しつつ、週日は神戸聖ミカエル教会での朝の礼拝と早朝聖餐式を終えて、それから発達障害者サポートセンターオリンピックア住吉に勤務しています。そして、主日は、神戸伝道区の各教会で奉仕をしています。

オリンピックでは、作業を通じて、入所

されている方々が自立できるための支援が主な仕事です。ここでは、真に必要な支援が求められています。しかし、これほど難しいことはないと感じています。自分では支援したつもりが、相手にとっては不都合で大変迷惑な行動になってしまっている。例えば、車いすを使ったサポートでは、その取扱いを誤れば、相手の方には不都合と不快感を与えてしまう。最初に与えられた、気付きはそこからでした。

このように、毎日、冷や汗ものの気付きあたえられ、これと格闘しています。以上、近況に代えて、私の仕事の一部をご報告させて頂きました。

(神戸教区聖職候補生・神戸教区付き)

今年の卒業生は何処に？



二〇一五年度 入学礼拝  
—三名が新たな学びを共に—

四月八日(水)午前一時より、二〇一五年度ウィリアムス神学館入学礼拝が、京都教区主教座聖堂(聖アグネス教会)で約五〇名の方々のご臨証を得て行われました。今年度、入学されたのは江渡由直さん(京都)、松山健作さん(京都)とヒューム・ウィリアム・ユーワンさん(大阪)の三名です。

館長は説教の中で、神学生なら誰でも問われる「召命感」に触れ、ラテン語の「呼ぶ」という言葉を語源として、「神に呼ばれること」だが、この神様の呼びかけが、本当に神様の声なのか、それとも自分自身の希望や願いを神様の声だと思ひ込み、信じ込んでいるだけなのか、一体誰に判断できるといふのだろうか、と問いかけました。そして神学生たちも、召命感が分からなくなったり、見えなくなってしまうような経験をするかもしれない。しかしそれも神様からの挑戦として、大切にして欲しい。ルカ伝24章のエマオ途上の物語は、自分の枠組みに囚われ、心が鈍くなってしまうている弟子たちであつてさえも、イエス様は決して見捨てることはなさらなかった。逆にイエ

ス様の方から近づいてこられ、一緒に歩き始めてくださる。そんな私たちに對しても、常にイエス様が一緒に歩いてくださることを信じて、自分の現実の姿から目をそらせることなく、同じ希望を持つ仲間たちと一緒に、一歩づつ確実に、神学校生活を歩み続けて欲しい、と語り掛けました。

その後、新入生は誓約をし、教員たちの祈りのうちに入学を許可されました。式後は教区センターでささやかな祝会がもたれました。

翌日から、神学生達は宇治のカルメル会修道院で、小南 晃司祭(神戸教区・卒業生)の指導



のもとでトリートを行いました。二日目からは「神学すること」について共に考えたり、バイブル・シェアリングを通してみ言葉に学びました。

▲ 聖母子像の前で集合写真。前列左から松山神学生・江渡神学生・小南司祭・ヒューム神学生

また新しい共同体メンバーでゆつくりと語り合う機会を持つことができました。

お世話になります  
教会実習

今年度も教会実習でお世話になります。よろしく願いいたします。

3年生

テモテ 遠藤洋介 京都復活教会

2年生

ルカ 柳原健之 神戸聖ミカエル教会  
セシリア塚本祐子 京都聖ステパノ教会

1年生

アンデレ江渡由直 川口基督教教会  
ヒューム・W・ユーワン 大阪聖愛教会

アンデレ松山健作 聖光教会 大阪聖三一教会

✠ 主の平安をお祈りいたします

\*二〇一四年二月二〇日(土)、本館卒業生のパウロ中村尚平司祭(中部教区退職)が逝去されました。師の魂の平安をお祈りいたします。

\*二〇一五年二月一六日(月)、本館卒業生のステパノ廣石修一司祭(九州教区退職)が逝去されました。師の魂の平安をお祈りいたします。

